
転生したんでチート貰って無双したいです

転生に夢を抱く者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生したんでチート貰って無双したいです

【Nコード】

N1812BA

【作者名】

転生に夢を抱く者

【あらすじ】

訳も分らないまま、死んでしまった転生者。能力を貰い無双したいと思いを抱きモンハンの世界に参る。何卒よろしく願います

転生（前書き）

真面目にふざけたいと思うのでよろしくお願いします

転生

君は死にましたー

誰？

私かい？まあ、気にするなよ

分かった、俺をどうするんだい？

君を転生させてあげよう！

なんでだい？

それは私がミスをしたからだよ

モンハンの世界にいきたいなあ

オッケーだよ、なにか能力とかつけさせるかい？

じゃあ、身体能力を格段にあげて欲しい、武器自由に作れる（能力は自由につけれる）ようにしたいかな

了解だよ、じゃあ転生してらっしゃい！

いつてきまああああああああああああああ

穴に落ちた

これで退屈しのぎには最適だなあ。あ、どこに落ちるかはランダムだ。

主人公の新たな物語が始まる

転生（後書き）

よろしくです。

転生したけど、じゃあじゃあ？（前書き）

文の長さは多分変わります。

転生したけど、どこだよ？

「だい・・・ですか？」

うつすら声が聞こえる

「大丈夫ですか？」

だんだん声が鮮明になってきた

「大丈夫ですか？」

大分意識が戻ってきた

「あ、ああ」

「良かった」

体を起こす。

声を掛けてくれたのは女性のハンター（黒髪）のようだ

「ここ、どこだよ？」

「雪山です」

雪山？だとすれば

「君はハンター？」

「はい、そうですよランクは3ですが」

ということはまだ初心者。

「村に案内してくれないか？記憶がないんだ」

場所確保しなければいけないからね

「分かりました！ではいきましょ「ドン！」なにっ!？」

侵入者がきたようだ、ドドブランゴだった。

腕試しでもするか…武器は…あった…で初期武器がマシンガン（機関銃ばい）でどうゆうこと？

弾薬無限で…さすがだ…。

無双したいけど、いきなりでびっくりした。

「ここは、共闘しないといけないな」

「え！戦うんですか!?!…分かりました」

彼女の武器は猟筒だった。相性はとてもいいが、威力が乏しい。

ドドブランゴが俺に向かって突進してきた

それを軽くとんで躲す

「すごい…」て聞こえたのは気のせいだ

機関銃をドドブランゴにむけて撃つ

ドドドドドドドドドドドド

果てしない弾幕を喰らい続けて力尽きた。

「これで、よし」

「じゃ、ないですよ!」

ん? なにか問題でもあった?

「なんですかその武器!? ボウガンでもないですよね?」

確かにこれ見たら誰でもそうなるよなあ
だがしかし

「これ? 作った」

「え... ええええええええ!!」

「驚くか?」

「そうですよ! あなた何者ですか?」

あ、どう説明しよう。記憶喪失でいいか

「記憶喪失なんだよね」

「え?」

「いや、起こしてもらった時から自分の記憶がないだよね」

「そうですか…」

気を落とす女性

「気にするな、今から新しい人生が始まると思えば」

「うん…」

「というか、早く村に行きたいのだが」

「あ、はい忘れてました、付いて来てください!」

さっきの機嫌はどうしたのか
とりあえず彼女に付いていく

「あなたの名前はなんですか？」

付いていく途中に話しかけられた
名前どうしようかな

「俺の名前はアレクだ。君の名は？」

「アレクさんですね!私の名前はミコトです!」

彼女はミコトという名前らしい

「あ、もうすぐで付きますよ」

確かにそこにうつすら村が見えてきた。

さて、今日から楽しそうだ

転生したけど、どうなんだ？（後書き）

次話は村の話です

村にたどり着いた（前書き）

村をオリジナルにするためミコトはポツケ村のハンターではなくな
ります

村にたどり着いた

村に着いた。

「少し村長さんと話してくるので待つてくださいね」

「分かった」

そう言つとミコトは俺から離れて去っていく
少しさびしいと思つたのは気のせいだろう

しかし、いきなり無双できるとはあれは最早無双奥義なのではない
だろうか

これから、多分ここでハンターやっていくと思うからいいか
村は結構豊かで温泉があったり、畑があったりした。

とりあえず、不自由はあまりしなさそうだ

「アレクさん！」

「ミコトかどうした？」

「村長さんが会いたいそうなので来てください」

「分かった」

なんか少し興奮気味でないか？嬉しそうな顔もしているが
そんなミコトの後を付いていく

「やあ、君がアレクかい？」

「はい、そうですが」

声を掛けてきたのは村長のミカエルさん（後で知った）だった
結構若い女性だった

「さっきはあのドドブランゴを倒してくれたたってね？」

「まあ、そうですよ」

「あんた、その武器はなんだい？見たことないんだが」

「作りました」

「武器も作れるのか！興味がわくね」

「ところで、あんた記憶喪失と聞いたんだが…」

「そうですね」

なんか答えるしかしてないよな

ミコトはしっかり聞いているが、目を輝かせてるよ

「話は飛ぶがここのハンターになってみないか？」

「それは飛びますね、でも…」

なんとか、交渉してみよう

「こう、便利に暮らせるように」

「ちゃんと、家も建てるし、不自由ないような生活させてあげるよ」

「なら、いいでしょう」

「いいの!？」

聞き手だったミコトが嬉しそうに驚く

「まあ、どのみち暇ですし」

「それは、よかったじゃあ早速作りかかるとしよう」

「ありがとう」

「いやいや、こちらもハンター不足で嬉しいんだよ」

「あ、ところでこの村の名前は？」

「改めても含めてようこそ『アイルー村』に！」

「これからよろしくお願いします！」

村長とミコトが挨拶した

「ああ、よろしく！」

これから頑張らないとな。

ん？アイルー村？あ、よく見たらアイルー結構いるな

ざっとみただけで20匹くらいが歩いてるよ

「「「にゃ！」「」」

アイルー達の声が聞こえたのは幻聴だろう

それで、この後はミコトに村の案内を兼て挨拶をした。

で、今家の前にいるのだが

あの、短時間でどうやって建てた？？？

そこには、先ほど村長に聞いてやってきたがいつのまにか一軒家が建っていた

気にしたら負けなのだろう

とりあえず、部屋を確認するために家にはいる

キッチン、個部屋×3、倉庫、風呂（露店で、かなりデカかった）、
寝室、アイルー部屋

最後のは多分アイルー達の部屋だろう。
なんか、いろいろあった。

そして、隣にいるミコトが

「なんで、こんなに大きいの？一目で分かるよう」

だそうだ、俺だって驚いた。

何人か住める家だ

とりあえず、今日はゆっくり眠ることにした

村にたどり着いた（後書き）

アイルー村にしたのは、ただ単に作者がアイルー好きだからです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1812ba/>

転生したんでチート貰って無双したいです

2012年1月5日18時48分発行